



あめりかの音楽事情

あれこれ

第1回 M. T. N. A. のこと

福田靖子

この7月～8月には、日本人のピアノ曲をひっさげて、渡米します。といってもこの小誌をお手にとられる頃には、演奏会も終わっていることでしょう。

日本の音楽教師の多くが、ヨーロッパ、ことに洋楽草創期には、ドイツで学んだ教師が圧倒的に多いことからヨーロッパにおける音楽事情は、よく知られているように思います。が、アメリカに行ってみて、音楽関係者と対話しますに、「日本ではアメリカの事情を知っていない」とか、「わがニューヨークこそは、世界の楽壇である」という、手前勝手とも思える言葉にぶつかるのです。

そこで、今回より「私の感じたアメリカ」を、拙文に綴ってみたいと思います。

第1回は『The Music Teachers National Association のこと』にしましょう。

The Music Teachers National Association とは、字の如く、全国(米)音楽指導協会とでも訳しましょうか、全米的な音楽指導者の権威ある団体です。

アメリカ人は「人間関係を持つことが、非常に上手だ」ということは、そこが、この国の悩みでもあるのだと思います。

日本人にとって、目の青い人種、又は、銀髪の人種、(最近では、折角の黒髪を染める人もいようですけれど)が、日本人だなんて考えられないことです。

しかし、アメリカ人には、金髪もいれば、黒髪もいる背の高いのから、色白の人間から、真黒な人間まで、ありとあらゆる人種が、アメリカ人となり得るのでからそこにどうしても、お互いを知り、己れを知らしめるべき場が必要となってくるのでしょう。

アメリカには、音楽関係の団体がいくつもあります。その中で、プライベートレッスンをしている音楽の先生方の集りでは、このM. T. N. A. が一番大きく、また、

古い歴史を持つものようです。

Music Teachers といっても、ピアノ指導者が圧倒的に多いということは、管・弦楽器や声楽は、日本でも、吹奏楽団や二期会などの大きな団体があり、作曲家は作曲家同志でグループを作っているように、アメリカにも大きな組織があるので、必然的に、ピアノ教師が多数をしめるのでしょう。

ピアノ教師だけの団体には、The Guild of Piano Teachers がありますけれど、このギルドについては、またの機会に御紹介しましょう。

M. T. N. A. 彼らは、そう呼びます。

そして、一番大切なことは、彼らが、そのメンバーであるということの誇りを強く持っているということです。

確かに、この組織の発会は、そのマークにもあるように、1876年ですから、もう一世紀に近い歴史を持っているのですが、単に歴史が古いというだけでなく、誇り高き人々の集り、が、この団体を支えているのではないかと思います。

M. T. N. A. メンバー(会員)資格

誇り高き M. T. N. A. のメンバーになるには、すでに正会員である2人の推薦が必要だということです。

メンバーは Prouisinal 暫定(者)

Experience 熟練(者)

Professional 専門(家)

の三段階からなっていて、推選者が、その地区の会にはかり、メンバーの過半数以上の賛成を得ると、やっと、Prouisinal の会員になることができるのだそうで、日本流に言えば、準会員とでもいいでしょうか、この段階ではまだ、本当の会員とはいえないわけです。

そして、重要なことは、Prouisinal であるからといって、永久に M. T. N. A. のメンバーづらをしていられるというのではないことです。

Prouisinal になって、5年の間に、Experience の会

員になれなければ、M. T. N. A. を除名されてしまうのです。

では、Experience になるには、どんな資格がいるか、と申しますと、二つの方法があります。

一つは試験を受けて、Experience の資格を得るか、5ヶ年の間に『よい生徒を出す』という指導者としての業績を残すことなのです。

では、よい生徒、とは、何を基準にしているかと申しますと、M. T. N. A. 主催の年一回の音楽グレイドテストに、多くの生徒を受験させ、よい成績をおさめさせるということになるのです。

この音楽グレイドテストについては、あとで述べることにしましょう。

では、Professional 会員は、と申しますと、この称号を持つメンバーは、本当に数少く、文字通りのプロフェッショナルな教授者に限られているということで、大学の現役の教授が大部分をしめ、家で個人教授のみをしている指導者では、全米で20人位しかいないであろう、ということでした。

では、大学の教授であれば、だれでもこの Professional Member になれるかという、決してそうではなく演奏経験、教授実績、M. T. N. A. Member としての実績など、総合実績があつて、やっと Professional Member となれるのです。

去る3月に出席した今年度の M. T. N. A. 全国総会ともいえる、オレゴン・ポートランドで開催された Convention において、このプロフェッショナルメンバーは、ピンク地の名札を、エクスペリエンス・メンバーたちは、白地の名札を胸につけ、何会員であるか、すぐわかるようになっていました。

このコンベンションで、偶然に知遇を得、公の通訳を買って出てくださった、二世の中田氏も、このプロフェッショナル会員の一人で、「全米で20人」の中のお一人でした。

M. T. N. A. 会員数

では、何人位の会員で、M. T. N. A. を支えているかと申せば、Prouisinal (暫定会員)を含めて、全米で12,000人位の会員がいるということでした。

オレゴン・ポートランド市に限っていえば150人の会員がいるということです。ポートランド市は、約37万の人口、公立学校の先生のアルバイトなども含めたピアノ教師と名のつく方は、1,500人位いるということですから、M. T. N. A. 会員は、一割のエリート教師といえるでしょう。

日本とアメリカのピアノ教師数

ついでながら、日本のピアノ教師の数は何人位でしょうか。これはまったく正確な数は、つかめていないといつて良いでしょう。

〈楽音〉で、今から約2年ほど前におこなった2つの調査では、何らかの形でピアノを指導している方は、約45,000人、学生アルバイトを含めれば、50,000人位であろうということになりました。

日本の人口が約1億1千万人。それに対してピアノ教師が50,000人。アメリカでは、約10万余のピアノ教師がいるであろうということですから、アメリカの人口が、約2億1千万人ですから、日本とアメリカでは、その比率が、ほぼ同じであるといえましょう。

まったく違うところは、日本では何の組織も存在しないということです。

アメリカでは、良い教育をおこなうために、自らを律し、防衛し、教育者としての誇りを築くためにM. T. N. A. のような組織を作ったといえるのです。

M. T. N. A. の会費

さて、全米のピアノ教師の約一割が属しているM. T. N. A. 会員たちの運営は、何によってなされているのか、私の最も興味あるところでした。

日本においては、「会員が会費を納める」とこれ実に当り前のことが、なかなか実行されないのです。例えていえば、ある大学の同窓会があるとします。その会費を毎年徴収するとしたら、何人の人が納めるでしょうか。そこで、卒業年度に終身会費という名目で、少々多額の金額を集め、それで一ヶ年の諸経費の一部をまかなっている、という学校が殆どではないでしょうか。

年一回、同窓会費を納めることによって、母校とのつながりを感じ、深い関係を保つことができるというものですが、どうしても年一回の会費を忘れるというのが人情ですから、終身会費などという制度が生れるわけです。

同窓会の会費でこれですから、ピアノ指導者のグループを作ったとして、自主運営は、至難の技に近いのです。M. T. N. A. のすばらしいコンベンション、組織力、運営法などを見ますと、国家的統制力でやっているのかと思えるほどでした。後に述べることですが、子供たち教師たちにスカラシップまであるのですから。

しかし想像に反して、国からの援助はまったくないということ、ロケット一台分のお金があれば……と日本のだれかがいいそうな事を、アメリカの数師たちもささやき合っていました。

組織の形として当然のことながら、M. T. N. A. も、City 都市、State 県、Division 地区(日本でいえば、中国地方とか、四国地方とか) National 国家、(全国という意味でしょうか)と、つながって、それぞれに、プレジデントがいます。このプレジデントの会議にも出席しましたが壮観でした。

民間からの寄附を募りつつ、自主運営をしているM. T. N. A. の会費は、一年16ドルということでした。

その中の11ドルが、National にいき、ここから、年6回、雑誌が送られてくるのです。

State には、年4ドルが廻り、City には、年間たった1ドルが集められるということで、これでは、「ロケット一台分のお金があったら……」とぐちの一つもでてくるのが当然といえましょう。

しかし、City 市、State 県からの「ニュース」がタイプ印刷ながら配布されているのを見せていただき、どこからその費用が出されるのだろうかと思ふ位でした。(つづく)

次回は「お月謝のこと」などにもふれる予定です。